

「コロニアル・ホテル」から 「アジアン・リゾート」へ —アジア海域におけるホテル文化の成立と展開—

大橋健一（立教大学大学院観光学研究科・教授）

1 アジア海域と観光

国際連合世界観光機関（United Nation World Tourism Organization）によれば、全世界の年間国際観光到着者数は、2030年に18億人に達すると予測されている。地域別に見た場合、アジア太平洋地域における年間国際観光到着者数の伸びは世界で最も著しく、2030年には5億3500万人に達すると予測されているとともに、その国際観光市場における大きさも全世界の30パーセントに達すると予測されている¹⁾。現在、アジアは地球規模での観光の展開において最も活発で成長が期待された地域となっている。

このような中で、観光はアジアにおける社会や文化を論じるに当たって無視し得ない重要なテーマのひとつとなっている。このことは、観光が単なる余暇・娯楽現象を越えて現代アジアの社会・文化のさまざまな側面を条件づける重要な現象となっていることを意味する。しかしながら、これまでになされてきた観光に関する研究では、もっぱら観光産業の運営に関する問題が中心に扱われることが多く、観光という現象の社会的・文化的意味を解明する研究が十分に蓄積されているとは言いがたい。

そこで本稿では、観光という切り口を通してアジア海域における社会・文化の性格を明らかにするとともに、アジア海域における観光がいかに海域の社会的・文化的文脈と密接に関わる現象であるかを明らかにする試みを行ってみたい。その際、観光という現象を象徴的にとらえる具体的な対象としてホテルに着目することにする。ホテルという施設は、観光を成立させる基本的なインフラストラクチャーのひとつであるだけでなく、社会的・文化的施設としての性格を有する。特に西洋発祥のホテルという施設がアジア海域においてもつ意味を探ることは、ホテルを通して観光とアジア海域の関係を明らかにすることにつながる。

そこで以下では、アジア海域におけるホテルの出現とその展開を歴史的に追跡し、そこに成立したホテル文化の様相をアジア海域の社会的文脈の中で理解してゆくこととした。

2 アジアにおけるホテル

ホテルという施設は、観光における最も基本的な基盤施設のひとつである。ホテルは、観光移動の結節点に建設され、それらの基本的機能として宿泊・休息のための安全性や快適性が求められる。しかしながら、実際にホテルが社会的に担ってきた意味は、単なる観光のための施設・手段をはるかに越えたものであるといえる。

今日、われわれが一般的に「ホテル」と呼んでいる施設は、19世紀のヨーロッパにおいて出現したいわゆる「グランド・ホテル」をひとつの原型としている。グランド・ホテルは、産業革命にともなう技術革新と経済発展、交通機関の発達と旅行スタイルの変化、旅行者としての富裕層の出現を背景に、近代社会の象徴としてまずヨーロッパに出現した。そして、その後、ヨーロッパを起点とした近代社会の地理的拡大にしたがってホテルという施設は地球規模で普及していった。

非西洋社会においてホテルは、このようなヨーロッパを起点とする近代社会の地理的拡大、すなわちヨーロッパによる植民地主義の展開を支える施設であったといえる。このような背景から、非西洋社会におけるホテルには、以下の多義的な性格が付与されることと

なった。

まず、非西洋社会におけるホテルに求められたものは、「文明化」されていない土地を旅する西洋人旅行者の文化的リスクを縮減し、西洋人旅行者が慣れ親しんでいる生活様式をそれらの土地においても維持可能とするための基本的パッケージを用意することであった。他方で、非西洋社会におけるホテルは、西洋人旅行者が抱く非西洋社会に対するエキゾチシズムや「オリエンタリズム」を充足させる空間である必要もあった。

非西洋社会の側からホテルをとらえ返すならば、ホテルとは、西洋、近代、文明、そして植民地勢力と深く結びついたものであったといえる。

非西洋社会におけるホテルをめぐるこれらの意味や性格は、非西洋社会におけるホテルが西洋・非西洋間の文化的交渉や政治経済的力関係が投影された空間であることを物語っている。

3 アジア海域における「コロニアル・ホテル」の歴史的展開

上述のように、アジア海域における西洋起源の施設としてのホテルの出現は、西洋によるアジア海域への進出、植民地化と深く関係している。このため、19世紀半ばから20世紀初頭のアジア海域の植民地状況下に出現した歴史的ホテルは、今日の観光マーケティングにおいてしばしば「コロニアル・ホテル」と呼ばれている。

アジア海域における主要なホテルについてその設立年を見ると以下のような展開を確認できる²⁾。

- 1845年 New Oriental (ゴール、スリランカ)
- 1846年 Astor House (上海、中国)
- 1850年 Suisse (キャンディ、スリランカ)
- 1863年 Astor (天津、中国)
- 1864年 Galle Face (コロンボ、スリランカ)
(1869年 スエズ運河開通)
- 1873年 New Grand (横浜、日本)
- 1876年 Oriental (バンコク、タイ)
- 1877年 Mount Lavinia (マウント・ラビニア、スリランカ)
- 1878年 Fujiya (箱根、日本)
- 1880年 Continental (ホーチミン市 (サイゴン)、ベトナム)
- 1885年 Eastern & Oriental (ペナン、マレーシア)
- 1887年 Raffles (シンガポール)
- 1888年 Savoy Homann (バンドン、インドネシア)
- 1890年 Grand (コルカタ、インド)
- 1890年 Imperial (東京、日本)
- 1895年 Queen's (キャンディ、スリランカ)
- 1898年 Maidens (デリー、インド)
- 1900年 Beijing (北京、中国)
- 1901年 Strand (ヤンゴン、ミャンマー)
- 1901年 Metropole (ハノイ、ベトナム)
- 1901年 Saigon Morin (フエ、ベトナム)

- 1903年 Taj Mahal (ムンバイ、インド)
- 1909年 Nara (奈良、日本)
- 1911年 Oranje (スラバヤ、インドネシア)
- 1911年 Manila (マニラ、フィリピン)
- 1914年 Keijo (ソウル、韓国)
- 1922年 Dalat Palace (ダラット、ベトナム)
- 1923年 Railway (ホアヒン、タイ)
- 1925年 Majestic (ホーチミン市 (サイゴン) 、ベトナム)
- 1928年 The Peninsula (香港)
- 1929年 Le Royal (プノンペン、カンボジア)
- 1929年 Peace (上海、中国)
- 1930年 Grand (ホーチミン市 (サイゴン) 、ベトナム)
- 1931年 Grand Hotel d'Ankor (シエムリアプ、カンボジア)
- 1932年 Setta Palace (ビエンチャン、ラオス)
- 1936年 Imperial (ニューデリー、インド)

このようなアジア海域におけるホテルの展開について注目すべき点のひとつは、1869年のスエズ運河開通以降、海域におけるホテルの設立が増加していることである。1869年のスエズ運河の開通、そして海上交通手段としての蒸気船の導入によって、19世紀半ば以降アジア海域への旅行は増加し、それに伴って旅行をめぐる快適さや豪華さの水準はそれ以前とは異なる高さが求められることとなった。ホテルという施設が各地に開設されるということもその現れであり、宗主国のメトロポールにあるホテルと同等の快適さ、設備、サービスの水準がアジア海域のホテルにも求められるようになった。

また、このようにしてアジア海域の各地にホテルが開設されてゆく中で、ホテル事業をアジア海域で本格的に展開しようとする事業者が出現したことも注目すべき重要な点である。上記リストに登場する1885年のペナンにおけるEastern & Oriental (写真1)、1887年のシンガポールにおけるRaffles (写真2)、1901年のヤンゴンにおけるStrand (写真3)、1911年のスラバヤにおけるOranje (写真4)の各ホテルは、イスファハン出身のアルメニア人ホテル事業者サーキース一族によって経営され、彼らはアジア海域においてホテルチェーンを形成し、顕著な活躍を見せた。1880年代半ばから1920年代末にかけて、かれらは海域の主要都市で9つのホテルを経営しており、アジア海域のホテル文化に大きな影響



写真1 Eastern & Oriental Hotel
(ペナン)



写真2 Raffles Hotel (シンガポール)



写真3 Strand Hotel (ヤンゴン)



写真4 Hotel Oranje (スラバヤ)

を与えた。ホテル事業におけるかれらの成功の背景には、アルメニア人ディアスポラとしてのかれらが植民地社会にあって民族的にも、文化的にも、政治的にも中立的であったことが有利に作用したのではないかとの指摘も存在する。

この点とも関連して、さらに注目すべき点は、「コロニアル・ホテル」という概念の意味に関してである。アジア海域におけるホテルの導入と発展は、海域の植民地状況のもとで行われたため、植民地状況下のホテル、あるいは植民者が建設したホテル、植民者のためのホテルという意味で「コロニアル・ホテル」と呼ぶことが可能かもしれない。実際、これらのホテルは、海域各地の脱植民地化の過程で、反植民地運動のターゲットとなったり、独立運動のシンボルとされることもあった。しかし、植民者/被植民者という単純な枠組だけでこれらのホテルの社会的、文化的意味を理解することができないことは、植民地状況下でのアジア海域においてアルメニア人ディアスポラのホテル事業者が重要な役割を果たしていたことから明らかである。

さらに論点を現代的文脈にまで展開させるならば、「コロニアル・ホテル」という用語は、今日、観光マーケティングの文脈において用いられることが多いという点も重要である。すなわち、それは現代観光の文脈における「コロニアリティの商品化」、「コロニアル・ノスタルジアの消費」を意味する。この点において「コロニアリティ」の意味が時代によって変化することに注意することが必要である。たとえば、シンガポールのラッフルズ・ホテルは、1991年にホテルの大改修をへて再開業をし、以後、現代観光の文脈で最も代表的な「コロニアル・ホテル」と目されるようになった。また、その成功により、その後アジア海域各地で多くの歴史的ホテルの改修と「コロニアリティ」の商品化のトレンドを生み、観光商品としての「コロニアル・ホテル」は現代アジアの観光マーケティングのキーワードのひとつとなっている。このような状況の下、「コロニアリティ」は、この観光商品の消費者とは誰なのかを重要な問題として、かつての植民者/被植民者という単純な枠組を超えて複雑化している。

4 「アジアン・リゾート」の発明

さて、アジア海域のホテルをめぐる力関係は、同海域における脱植民地化、国民国家の形成に伴って変化し、ホテルの社会的意味も変化した。

アジア海域の脱植民地化過程で新たに誕生した国家にとって観光事業の振興は、外貨獲得の手段として重要な政策的意味をもち、また、新興国家の国家的アイデンティティの確立とその表明においても重要な意味をもった。このような中、ホテルは、これらを体現する施設・空間として象徴的な意味をもつこととなった。

アジア海域におけるこのような新たな社会的環境においてホテルに求められた課題は、国家的アイデンティティとしての地域性の表現、そして国際水準アメニティの充足であっ

た。とはいえ、これら相反する二つの課題を同時に満たすことは非西洋社会におけるホテルに共通する基本的課題とも言える。

このような課題への対応の例として、ここではスリランカを採り上げることにする。スリランカは、1948年に独立した後、1966年に観光開発政策を本格化させ、1969年から同国西南海岸のベントータにおいてBentota National Holiday Resortの開発に取り組んだ。このプロジェクトにおけるリゾート・コンプレックスの建設に起用された建築家にジェフリー・バワ（Geoffrey Bawa）がいた。

「熱帯モダニズム建築（tropical modernism architecture）」のパイオニアとも評されるジェフリー・バワの建築の特徴は、地域の建築素材を活用しつつ屋内と屋外の連続性を重視した開放的な空間作りによって、建築と地域の自然や文化の共存・融合を目指す建築コンセプトを生み出したことにあるとされる³⁾。バワは、宗教施設、社会施設、文化施設、教育施設、商業施設、行政施設、居住施設など多様な建築を設計しており、1979年にはスリランカの新国会議事堂の設計にも携わった。

先述のベントータにおけるリゾート開発プロジェクトでバワは2つのホテルを設計している。中でもBentota Beach Hotel（写真5・6・7）は、それまで一般的とされてきた国際的水準のリゾートホテルとは異なる、ホテルが立地する場所の自然環境や文化的伝統を反映させた「場所性」を備えたアジアで初めてのホテル建築の例と評価されている⁴⁾。このようなホテル建築の創出は、非西洋社会のホテルに求められる相反する2つの課題への解答であったと考えられる。

このようなバワの建築における複合性の源泉は、バワの生い立ちとも深く関係していると考えられる。

バワは、英国植民地のセイロンで裕福なムスリムの法律家の父親とオランダ、スコットランド、シンハラの子孫の母親のもとに生まれた。1938年に英国に渡り、英語、法律を学び、1946年にセイロンへ戻り短期間コロomboの法律事務所で働いた。しかし、母親の死後、法律家の仕事を辞め、2年間アジア、アメリカ、ヨーロッパへ放浪の旅へと出る。1948年セイロンが独立するとバワはセイロンへ戻り、ゴム農園を購入し、そこを旅行中に魅せられたイタリア式庭園に着想を得ながらそれをセイロンという熱帯の



写真5 Bentota Beach Hotel
（ジェフリー・バワ設計）外観



写真6 Bentota Beach Hotel
（ジェフリー・バワ設計）中庭



写真7 Bentota Beach Hotel
（ジェフリー・バワ設計）客室

環境の中で変換するという試みを行った。この試みは、バワの欧亜混血者としての文化的アイデンティティの現れとも評価されているが、バワがそのパイオニアとされる“tropical modernism architecture”という文化的折衷性や複合性を特徴とした彼の建築スタイルの原点はここにあったとされている⁵⁾。バワはその後本格的に建築を学び、1957年に正式に建築家として歩み出した。

バワの創出した建築コンセプトは、スリランカのみならず、その後のアジアにおけるホテルやリゾートの設計や計画に大きな影響を与えた。中でも今日のアジアを代表するホテル・リゾート・グループとしてグローバルに注目されている「アマンリゾート (Amanresorts)」は、バワからの影響を強く受けた存在であることがしばしば各所で言及されている。

「アマンリゾート」は、1988年に設立された高級ホテル・グループであり、同年にタイのプーケットに最初のプロジェクトとして「Amanpuri」を開業させている。同リゾートホテルは、客室数を少数に限定していること、立地場所の自然・文化環境を活かしたミニマルな建築デザインを採用していることなどに大きな特徴を持ち、そこでは土着在来の建材や建築工法が用いられた。同グループは、同様の開発コンセプトをその後のリゾート開発事業にも適用し、アジアを中心としながら今日では世界各地で事業を展開させている。

「アマンリゾート」が採用した立地場所の自然・文化環境とリゾート・ホテル施設との融合という開発コンセプトは、まさにそれがホテルが立地する場所の自然環境や文化的伝統を反映させた「場所性」を備えたバワの建築コンセプトからの大きな影響を受けているとされる点である。

バワとアマンリゾートとのつながりに関して興味深いのは、このような建築コンセプトの継承という点にとどまらない。アマンリゾートの創業者もまたバワと同様に欧亜混血者であったということは、単なる偶然ということ以上にアジア海域における社会的文化的文脈とホテルとの関係を考える上においてきわめて重要な事実である。

アマンリゾートの創業者エイドリアン・ゼッカ (Adrian Zecha) は、1933年オランダ領東インドのジャワ島スカブミに生まれている。彼は父方にボヘミア出身のオランダ軍兵士の高祖父をもち、その娘である曾祖母が中国福建省アモイ出身のスカブミの有力華人の曾祖父と結婚し、ゼッカ姓を引継いでおり、母方にマレーシア華人の血筋を受けている⁶⁾。

ゼッカは、アメリカで大学卒業後、インドネシアでジャーナリストとして仕事を始め、その後、ニューヨーク、東京、香港と活動の拠点を移動させた。1961年、ゼッカは香港で『Asia Magazine』という雑誌を創刊し、また1970年には『Orientations』という雑誌を創刊した。その後、このようなアジアにおける出版業の経験を買われ、1973年にマリOTT・ホテル・チェーンのアジア地区のアドバイザーとなったことを契機として、ゼッカはホテル事業の世界に入っていった。1974年には、アジアにおける高級ホテル・グループであるリージェント・インターナショナル・ホテルズの経営に参画した。そして、1988年、ゼッカは、アマンリゾートを設立し、その後「アジアン・リゾート」と呼ばれることとなる一連の新たなホテル・リゾートである「アマンプリ」をプーケットに開業する。

「アジアン・リゾート」という用語は、「コロニアル・ホテル」と同様、観光マーケティングの領域で一般的に多用されるものであり、必ずしも厳密な概念化が行われているものではないが、それはアジアのリゾート、あるいはアジアに存在するリゾートを単純に意味するものではない。「アジアン・リゾート」という用語がマーケティング的に意味をもつのは、それが独特の商品としてひとつの領域を成すからであり、別言すれば、それはひとつのホテル文化の成立とも言うるものである。このような独特なひとつのホテル文化の成立の背景にバワやゼッカという欧亜混血者が存在することは、ポストコロニアルなアジア海域におけるホテルを考える上で重要性をもつ。かれら欧亜混血者の体現した文化的複合性は、ポストコロニアル、そしてグローバルな文脈におけるアジア海域のホテル文

化を構成する重要な要素となっており、それが「アジアン・リゾート」に内実を与えているのである。

5 アジア海域における文化的複合性・ホテル・観光

本稿では、アジア海域におけるホテルの歴史的展開を「コロニアル・ホテル」から「アジアン・リゾート」への変遷という流れの中で説明してきた。しかしながら、その変遷は単純な「コロニアル・ホテル」の衰退と「アジアン・リゾート」の隆盛というストーリーでとらえられるものではない。現代のアジア海域におけるホテル、リゾート、そして観光をめぐる状況において、「コロニアル・ホテル」と「アジアン・リゾート」はともに重要な存在となっている。このことは、ホテル文化という観点からみたときに両者が商品としての性質を異にしながらも一定の文化的共通性を有していることを意味しているのではないかと考えられる。

このことを裏付けるかのように、実は「アジアン・リゾート」の「発明」の立役者であるゼッカは、1989年から始まったヤンゴンのストランド・ホテルの改修事業にも関与していた⁷⁾。ヤンゴンのストランド・ホテルは、既述の通り、アジア海域におけるホテル事業の黎明期に活躍したサーキース一族が1901年に開業、経営していた「コロニアル・ホテル」のひとつである。その改修事業にゼッカが関与したということは、現代のアジア海域における観光において「コロニアル・ホテル」と「アジアン・リゾート」が重要な接点をもっていることを示している。

「コロニアル・ホテル」と「アジアン・リゾート」の接点、共通性とは、両者の成立に関わった者たちが備え、またホテル空間に体现された文化的複合性に他ならない。そして、それこそがアジア海域が植民地化、脱植民地化、国民国家化、そしてグローバル化の過程の中で歴史的に蓄積してきた社会的、文化的特質そのものであったのである。

人の移動の結節、東洋と西洋の十字路としてのアジア海域が歴史的に蓄積してきた文化的複合性は、人の移動と交流を支える基盤施設としてのホテルという空間に多様なかたちで反映されてきた。ホテルという空間の成り立ちを分析することを通して、われわれは、アジア海域の文化的複合性に迫ってゆくことができるだろう。また同時に、アジア海域の観光の構想において、この文化的複合性は、海域の観光の特質として重要な文化資源、文化資本となるにちがいない。

注

- 1 United Nations World Tourism Organization (2015)
- 2 <http://www.famoushotels.org/hotels/timeline>による。
- 3 Jazeel (2007) pp.3-4.
- 4 Robson (2013)
- 5 Robson (2002) p.23.
- 6 山口 (2013) pp.18-21.
- 7 Augustin (2013) p.11.

文献

山口由美 (2013) 『アマン伝説 創業者エイドリアン・ゼッカとリゾート革命』
文藝春秋.

Augustin, Andreas (2013) *The Strand Yangon*. Vienna: The Most Famous
Hotels in the World.

Jazeel, Tariq (2007) “Bawa and Beyond: Reading Sri Lanka’s Tropical
Modern Architecture”, *South Asia Journal for Culture*. Vol.1, pp.2-21.

Robson, David (2002) *Geoffrey Bawa: The Complete Works*. London: Thames
& Hudson.

Robson, David (2013) “Remembering Bawa” [http://www.archdaily.com/
460721/remembering-bawa](http://www.archdaily.com/460721/remembering-bawa)

United Nation World Tourism Organization (2015) *UNWTO Tourism
Highlights, 2015 Edition*. Madrid: United Nation World Tourism
Organization.